

2020. 2. 7 (日) マタイ23:25~28

23:25 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている。

23:26 目の見えないパリサイ人。まず、杯の内側をきよめよ。そうすれば外側もきよくなる。

23:27 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいだ。

23:28 同じように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいだ。

<説教>

イエスは律法学者、パリサイ人を〈偽善者〉と呼び、「おまえたちにとってわざわいだ」とこれまで4回言って(23:13,15,16,23)、非難しておられます。

〈偽善者〉と訳されているギリシャ語は、もともとは「俳優」のことです。

舞台上、人前で演技をして、それを人に見せる、人から見てもらうのが俳優です。

律法学者やパリサイ人、〈彼らがしている行いはすべて人に見せるため〉(5)だとイエスは見破っておられました。

すべてを裏まで、裏の裏まで、裏の裏のそのまた裏まで、どこまでも正しく、間違ふことなくお見通しになっている目、神の目でイエスは彼らを見ておられました。

一方、律法学者、パリサイ人たちの目は神には向いていませんでした。

神がどう見ておられるかではなく、人の目にどれだけ立派に、素晴らしく、正しく、信仰深く、敬虔な人に見えるか、そんなことばかりを考えていたのが律法学者やパリサイ人たちでした。

また自分で自分(自分も人です)を見て自分は立派だ、素晴らしい、正しい、信仰深い、敬虔だ、と自画自賛してもしました。

そのように彼らの目はひたすら人に向いており、神に向いていませんでした。

ですから、十分の一の献げ物を厳格過ぎるほどにしていたのに、神の〈律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにして〉(23)いました。

彼らは神を愛してもいなかったし、人を愛してもしませんでした。

彼らが愛していたのは自分自身だけでした。

そんな彼らに対するイエスの5回目の「わざわい」の宣告です。

23:25 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている。

〈杯や皿〉は、食事でも儀式でも使うときは内側も外側もきれいに洗って使うものです。

外側だけきれいにして、内側は汚れたまま(または汚れた物を入れて)使うなどということはあり得ない愚かなことです。

律法学者やパリサイ人は、そんなあり得ないほどの愚かさでした。

そして〈内側〉に〈満ちている〉のが〈強欲と放縦(自製の無いこと)〉と言うのですから〈内側〉とは明らかに彼らの心のことです。

彼らは〈杯や皿の外側はきよめる〉、そういう「行い」はきちんとしている、人の目に見える部分は実に立派であり、正しく、信仰深く見えるようにしていました。

しかし、その〈内側〉、心の動機は人に見せるため、人から褒められるため、自分の欲望を満たすためでした。

だからいくら人の目に〈きよ〉く正しく立派で信仰深い行いのように見えても、イエスの目、神の目には〈外側〉すら汚れたものでした。

そういう「目の見える」お方イエスが言われます。

23:26 目の見えないパリサイ人。まず、杯の内側をきよめよ。そうすれば外側もきよくなる。

〈偽善の律法学者、パリサイ人〉に向かって「わざわざいだ」と言っておられるイエスですが、ここで同時に彼らから〈わざわざ〉でなくなり、彼らが〈内側〉も〈外側〉も、神の目にも人の目にも本当に〈きよく〉される道を、いわば最後通牒（さいごつうちょう）としてお教えになったように思います。

つまり、「『私たちは見える』と言い張るのを止めよ。自分たちが〈目の見えない〉者であることを認めよ。そして目の見えるわたしについて来なさい。わたしがあなたがたの内側をきよめる。あなたがたは自分で内側をきよめることはできない。だからわたしを信じなさい。わたしに依り頼みなさい。神に祈り求めなさい。」そういうことをイエスは言われたのです。

そして、確かに〈まず〉〈内側〉が大事ですが、では〈内側〉がきよめられさえすれば〈外側〉はきよくなくても、正しくなくても、いい加減でも、無頓着でも、どうでもいいというわけではありません。

〈外側もきよくなる〉ことも大事なのです。

でもそれもまた〈内側〉と同じくイエスの力、あわれみ、恵みによることです。

しかしそれでもそうしようとしないう〈偽善の律法学者、パリサイ人〉6番目の〈わざわざい〉です。

23:27 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいだ。

23:28 同じように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいだ。

墓の〈内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱい〉なので、毎年過越の祭りの時期には（このときもちょうどその時でした）巡礼者がうっかり墓に近づいて触ってしまい（儀式的に）〈汚れ〉で神殿に入ることができなくなることはないように、墓を白く塗って目立つようにしていました（結果、白く美しく見えることにもなっていたのでしょう）。

もしかしたら律法学者やパリサイ人たちは先頭に立ってその作業をしていたのかもしれませんが（または彼らの公務としてそういう役割があったのかもしれませんが）。

しかし彼らのそんな行いが〈外側は人に正しく見えても〉、人目には目立って〈美しく見えても〉、彼らの〈内側は偽善と不法でいっぱいだ〉、〈死人の骨やあらゆる汚れ〉以上に汚れているとイエスは言われたのです。

そのことに気付かない、またはもし気付いたとしても「見て見ぬ振り」をしている、どっちにしても〈目の見えない〉律法学者、パリサイ人でした。

そんな彼らは、彼らの教えを受け彼らの〈外側〉に欺かれている人々をも神の前に汚れた者、〈自分より倍も悪いゲヘナの子〉(15)にしていたのでしょう。

イエスは私たちを〈偽善の律法学者、パリサイ人〉として召しておられるのではありません。

〈偽善の律法学者、パリサイ人〉に対するイエスの非難のみことばは、確かに、正直、私たちの心に「まさに自分のことだ！」グサッと来るでしょう。

だからイエスは「彼らの行いをまねてはいけません」と言っておられるのです。

何よりも「イエスを信じない。悔い改めない」という〈彼らの行いをまねてはいけません〉。

そうではなく、私たちはイエスを信じて、イエスのもとに立ち返るのです。

そして目の見えるイエスに手を引いていただき、目の見えるイエスに目を開けて明るくしていただき、きよめるイエスにまず内側を、そして外側もきよめていただくのです。